

（2023 年 4 月に日本に留学してきた留学生（現在、大学 1 年生）が書いてくれたこと）

私の場合は、「軍のもとで勉強できない」というより、「したくない」という気持ちの方が大きくて、それで日本に来ることを決めた感じです。私はヤンゴンから車で 1 時間半くらいのところに住んでいて、子どもの頃から特に不便もなく、普通に幸せに暮らしてきました。ミャンマーでは昔から内戦とかあったみたいなんですけど、正直、私はあんまり実感していませんでした。自分の周りは平和だったから、国で何が起きてるのかもよく分かっていなかったです。

今戦争とか起きている場所もかなり私が住んでいる場所から遠いです。でも、クーデターが起きてから、だんだん生活の中で不自由さとか怖さを感じるようになってきて、ようやく「こんな国だったんだ」と気づき、戦争避難所での人々の生活なども知るようになって本当に心が揺れました。デモに出た知り合いが捕まったり、刑務所でひどいことされて亡くなったりして話を聞くようになって、すごくショックでした。軍は「ミャンマーは平和」とってアピールしたいから、都市部は一見落ち着いているように見せていますが、実際には中部や北部、東のほうでは学校も病院も街も空爆されてるって聞きます。ネットも遮断されていてニュースも届きませんが、たまに流れてくる情報だけでも本当に胸が痛みます。そこでの人のことに共感できました。自分は普通に勉強できますが、同じ年の子たちが戦争の中にいて、教育も受けられないって思うと、不公平すぎて、軍のもとで勉強する気になれませんでした。今のところ、私の住んでる地域は大きな問題はないですが、いつどうなるかわからないから、悪化する前に準備しておこうって思って留学を決めました。

私が出てきた時はまだマシだったのですが、今は徴兵制度があって、18~35 歳の男の人は海外に出られない状態になっています。日本の会社に内定もらって全部手続きが済んでいても、空港で帰されることもあるそうです。うちの兄も対象で、なんとか日本に来られたけれど、今も両親が街の偉い人に毎月お金を払っています。「軍に行けないなら、代わりの人に行かせるためのお金を払え」とみたいな感じで、払わないと嫌がらせされるからです。ミャンマーって、今は本当に“お金があればなんとかなる”って国で、逆にお金がない人は生きていくのも大変です。命の重さすらお金で決められてるような感じです。しかも、毎日のように停電もあって、わざと国民を困らせてるんじゃないかって思うくらいです。コロナのときも、国が何もしてくれなくて、市民同士で助け合おうとしても妨害されて、ボランティア活動していた人が捕まったりもしました。災害とかあっても助けてくれないし、国民が困ることで反抗しなくなるようにしている気がします。

このような状況の中、私は自分の生活がまだ平和なうちに、安全な場所で学んで、将来自分の国の人たちを助けたいと思ったんです。今の私にできることは少ないですが、教育の力で将来を変えられるって信じて、日本に来ました。国内で支援活動するのは本当に危なくて、いつ捕まるかわかりません。でも、海外から支援すればバレにくいし、軍も手を出しにくい。だから、日本にある NPO とか NGO みたいな団体で、将来ミャンマーを支援できたらいいなって思っています。私の場合は「軍のせいで勉強できなかった」じゃなくて、「軍のもとで勉強したくなかった」から国を出ました。でも、ミャンマーには「勉強したくてもできない」子どもたちがたくさんいます。そんな子たちを将来、私なりの方法で助けたいから日本に来ました。色々言いたいこといっぱいありますがなかなかまとめられないです。

（ミャンマー在住の卒業生が書いてくれたこと）

地震の後も支援はなく、被災者らは、自力でゴミの撤去をしているそうです。地震後のマンダレーでは、先週の金曜日から徴兵のため、マンダレー町にいる全世帯を対象にくじ引きをしました。全員が当るように、最初から手配されていて、当る番号が小さい方から順番で、軍に入るとのことです。軍と区長の家族、親戚、お金持ちの中国系の人達はくじ引きの対象外です。マンダレーに住んでいる、従兄弟は外科医で、彼も 当たりました。番号は大きいのですが、いつでも呼ばれます。18 歳~35 歳と専門職であれば、45 歳の一般人の男性は徴兵に必ず入らなければならないという政策を進めているそうです。

他の偉い軍の子供らは、ヨーロッパなどの良い大学で、アルバイトどころか、裕福な生活をしながら、高度な勉強ができています。将軍 3 番目の娘は東大にいるそうです。

私が今住んでいる所は、ヤンゴンで、上に書いたことが本当かと疑問を持つくらい毎日が賑やかです。バー、カラオケがたくさんあります。よくわかりませんが、薬(麻薬系だと思います)が使えるようです。というのは、クーデターに影響がない若者がくる場所になっているのを見ると、戦っている若者のため、悲しくなります。私もそういうのを見るのが辛いので、私も早くミャンマーを出たくなりました。

【ジャパンハートについて】



2025 年 3 月 28 日 12 時 50 分（日本時間 15 時 20 分）、ミャンマー中部・マンダレー近郊を震源とするマグニチュード 7.7 の大地震が発生しました。

ジャパンハートは、震源地とされるミャンマー中部に位置するザガイン管区のワツチェ慈善病院を拠点に活動しています。地震発生時には創設者で小児外科医の吉岡秀人が被災、手術中で全身麻酔をかけた患者を人工呼吸器具を使いながら屋外へ緊急搬送したほか、施設で 2 棟あるうちの 1 棟が崩壊するなどの被害を受けました。

翌 3 月 29 日早朝には震源地エリアに緊急調査チームを派遣、3 月 31 日より、地震による崩壊で運営不可能となったワツチェ慈善病院の敷地内での屋外診療および、巡回診療のための支援チーム編成と活動準備を開始し、さらに首都ネピドーにある 1,000 床規模の基幹病院から要請を受け、医療物資のほか水・食料などを直接届けました。

そして 4 月 1 日からは、ワツチェ慈善病院敷地内での医療活動と、ザガイン管区での巡回診療も実施しています。

ジャパンハートが 2025 年 4 月 1 日から 5 月末時点までで診療したのは、20 カ所で 3,000 人以上。また、のべ 4,000 世帯に食料・生活物資支援を届けています。今後は、医療支援を継続しながら、一部倒壊したワツチェ慈善病院の修繕、被害の大きい地域への巡回診療などを、中長期的に実施していく予定です。

■20 年以上にわたるミャンマーでの活動

ジャパンハートでは、1995 年に小児外科医・吉岡秀人が単身ミャンマーで医療支援をはじめたことをきっかけに、2004 年の団体設立時より 20 年以上同国で活動に取り組んでいます。その医療拠点が、今回震源地とされるミャンマー中部にあるザガイン管区のワツチェ慈善病院です。

■外国人立ち入り禁止地域で

ミャンマーでは、2021 年 2 月 1 日にクーデターが発生し、その後は軍と反対勢力との間で内戦が続いています。ジャパンハートのミャンマーにおける活動拠点である「ワツチェ慈善病院」は、戦闘が激化しているミャンマー北部・サガイン管区に位置しており、現在は外国人の立ち入りが制限されている地域です。

そのような厳しい情勢の中にあっても、吉岡医師は特別な存在として現地に受け入れられており、毎月およそ 1 週間、現地入りして医療活動を継続しています。今回の地震も、まさにその現地活動中に遭遇したものでした。

■現地の状況

現地では非常に大きな揺れと、一部建物の崩壊がローカルスタッフより報告が上がっており、ザガイン管区およびマンダレー付近では建物の倒壊の情報も多く確認されております。

■「ミャンマーは、私の経験上、外国の NGO が活動しにくい国です。とくに、外国人が直接関わる支援に対しては否定的な傾向があり、そのことが障壁となることもしばしばあります。そのためジャパンハートでは、医師や管理者を含め、すべてミャンマー人で構成された支援組織を構築してきました。

災害発生直後こそ、政府も一時的に外国人の活動を認めることがありますが、1 カ月も経つと、徐々に制限が強まっていくと予想されます。これからは、ジャパンハートの強みである“ミャンマー人による支援”を最大限に生かし、支援の届かない人々に対して、必要な物資と医療を確実に届けていくつもりです」



『東洋経済ネット』より ミャンマー大地震から 1 カ月、被災地で奮闘する日本人医師、被災者間の互助精神でゆっくりと復旧へ、今後は感染症対策がカギ | アジア諸国 | 東洋経済オンライン（国際医療 NGO「ジャパンハート」の吉岡秀人医師）

地震による被害

地震前



地震前



地震後



地震後



地震前



地震後



地震前



地震後



地震前



地震後

